

悠々の河

8

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

台風

「あの時の川の流れば凄まじいものでしたからなあ。今でも思い出すと、ぞっとします」

当時を振り返るように彌兵衛が答えた。

「そう、そう、流れに足をとられた村の子どもを救おうとして、文蔵さん、自分が流されてしまいなさったのでしたなあ。先々代の庄屋さんも正義感の強いお方だったと聞いております」

住職の話に、彌兵衛は辛い気持ちを押し込めるようにゆっくりと口を開いた。

「文蔵のことが有ってからは、よけいに一日たりとも意宇川のことを思わぬ日は有りませんでした。私も人の親ですからなあ。しかし、亡くなりました父と文蔵が、今まで私の気持ちを抑えてくれました。自分の息子を川で亡くしたことが川普請のきっかけと思われては、庄屋として、村の衆に申し訳無いですからなあ。立ち上がる時を、じっと待っております。七回忌までは、長い歲月でした」

「そこまで、よくお考えなされた。先々代さまのこともございます。それにしても、よう降りますなあ。この降り方は尋常では有りません。なんぞ嫌な災害が起きなければ良いが……」

住職の顔が曇った。

六月二十七日から降り始めた雨は、七月二日になって止んだ。増水した意宇川の水は、田畑に入り日吉村の民をはらはらさせた。



画 高田勲

しかし、この時の水は大事に到らず、幸いなことに、農作物への被害は少なかった。

「今年の大水は、あれで済んでホッとした」

「天が貧しいわしらに味方したのかもしれんな」村の人々は、そう言い交わした。

旧のお盆の送り火も済み、村人たちは田んぼで三回目の草取りに励んだ。

草取りの人々の腰から下げた縄の先からはきな臭い、虫よけの煙が辺りに漂っていた。真夏の太陽のもとで大きく育った稲は風が吹く度に、さわさわと軽やかな音を奏でた。人々は秋の収穫を信じてやまなかった。

ところが、日吉村の人々がホッとしたのも束の間だった。

元禄十五年（一七〇二年）八月二十七日、大型の台風が出雲地方を襲った。風は吹き荒れ、叩き付けるような激しい雨が絶え間無く大地を打ち続けた。このまま降り続ければ、何時間か後には村中を大洪水が襲うのは疑いようが無いことだった。

「母上とクニは、できる限り沢山の飯を炊き握り飯を作り、ゆうは竹の筒に飲み水を詰めてくれ。勘六と五郎太は、各集落の長に一刻も早く、決めてある高台の避難所に各々の住民を守りながら避難するように触れ回ってくれ。わしは、剣神社に災害本部を置いて今後のことを話し合おう。今までに経験がない程のとんでもないことが起こるぞ。もう一刻の猶予もない。風も雨も恐ろしい程だ。気をつけて行動してくれ！」

彌兵衛は言い終えると、素早く笠をかぶり蓑（みの）を羽織ると前屈みの姿勢で、嵐の中に飛び出した。